

主 題：救いの本質と目的 ②**聖書箇所：エペソ人への手紙 2章8－9節**

先週、エペソ2：1－7で救いの本質について学びましたが、きょうは、エペソ2：8－9を通して救いの目的について深く学んでいきたいと思っています。先週お話ししましたように、エペソ2：7に救いの目的が「それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜る慈愛によって明らかにお示しになるためでした。」と記されています。先週も少しお話ししましたが、救いの目的というのは、私たちが救われ、罪赦されて天に行くためではなく、神様の恵みが明らかに示されることなのです。エペソ1：6にも救いについて、「それは、神がその愛する方において私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。」と書いてあります。救いの一番の目的は、私たちが天に導くためではなく、神の恵みの栄光が現され、ほめたたえられるということです。救いが100%神の恵みであることを理解する時に、私たちはそれを理解することができます。何が言いたいかというと、私たちはその救いの恵みの中に信仰も含まれていると考えています。私たちは信仰を通して救われるのですが、その信仰すらも、実は神様が与えてくださったのです。信仰によって救われると言っているのに、その信仰すらも神様が与えられるというのは、少し理解しがたいですね？私たちの罪に影響を受けた頭でこれを100%完全に理解することはできません。ただ、このことをみことばにある事実として、真理として私たちは受け取るのです。“三位一体”も私たちは頭によって完全に理解することができません。でもみことばに書いてあるからそのとおりに受け取るのです。きょうのテーマもそうです。信仰すらも神様が与えてくださった、信仰すらも神様の恵みだった。そのことを少しでも理解することができるように、この8－9節を通して、ご一緒に学んでいきたいと思っています。

エペソ2：1－10

「：1 あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、：2 そのころは、それらの罪の中であってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。：3 私たちもみな、かつては不従順の子らの中であって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。：4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、：5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです——：6 キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。：7 それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜る慈愛によって明らかにお示しになるためでした。：8 あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。：9 行いによるものではありません。だれも誇るものがないためです。：10 私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにおいて造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。」

A. 三つの肯定

救いについて、8－9節には三つの肯定的な表現と三つの否定的な表現を見ることができます。そのことを通して、信仰すらも神の100%恵みのうちに入ることを学んでいきたいと思えます。

1. 恵みによる救い (8)

まず肯定的な表現の一つ目は、「恵み」による救いということです。私たちは「恵み」によって救われました。「恵み」とは何かということと、4節に書いている「あわれみ豊かな神」の「あわれみ」とは

何か？そして7節の終わりにある「慈愛によって明らかに」の「慈愛」とは何か？この三つのことばを見ることによって、「恵み」ということばの理解をさらに深めることができればと思います。

1) 恵み

まず「恵み」とは、それを受けるに値しない者に対して、神ご自身の意志により一方的に与えられる神の賜物、プレゼントです。「受けるに値しない」ということと、「神ご自身の意志により」ということと、「一方的」という三つがポイントになります。私たちは受けるに値しない者であったのに、神からの一方的な意志によって恵みを受けたのです。

2) あわれみ

では、二つ目の「あわれみ」とは何かということについて見ていきましょう。「あわれみ」は、受ける者がそれに値するか否かにかかわらず、困っている者に差し伸べられる援助という意味です。恵みと違って、受けるに値するか否かは関係ないのです。ただ困っている者に差し伸べられる援助です。私たちは何に困っていたでしょう？神の御怒りですよ？それに対して差し伸べられた援助、それが神のあわれみなのです。不思議ですよ？相反するものがある。怒っているのは神様で、それをあわれんでくださるのも神様なのです。

3) 慈愛

三つ目に、「慈愛」について見ていきましょう。「慈愛」、慈しむ愛です。これを聖書的に定義するならば、選ばれた者に対して与えられる神の無条件の愛という概念がそこに含まれます。少しみことばを見ましょう。コロサイ3：12「それゆえ、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者として、あなたがたは深い同情心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。」、私たちは選ばれた者として慈愛を身につけなければいけないということです。なぜ私たちは慈愛を身につけなければいけないのでしょうか？それは、私たちが最初に神様から慈しみを注がれた者だからです。私たちと同じようにイスラエルの民も選ばれていました。そしてイスラエルの民も選ばれたがゆえに、神様の慈しみを注がれたのです。慈しみには、神様の忍耐や神様の誠実というアイデアが根底にあります。これもみことばを見ていきましょう。神様が選びの民であるイスラエルにどのように慈しみを注がれたか、ホセア11：1-8に「:1 イスラエルが幼いころ、わたしは彼を愛し、わたしの子をエジプトから呼び出した。:2 それなのに、彼らと呼ばば呼ぶほど、彼らはいよいよ遠ざかり、バアルたちにいけにえをささげ、刻んだ像に香をたいた。:3 それでも、わたしはエフライムに歩くことを教え、彼らを腕に抱いた。しかし、彼らはわたしがいやしたのを知らなかった。:4 わたしは、人間の綱、愛のきずなで彼らを引いた。わたしは彼らにとっては、そのあごのくつこをはずす者ようになり、優しくこれに食べさせてきた。:5 彼はエジプトの地には帰らない。アッシリヤが彼の王となる。彼らがわたしに立ち返ることを拒んだからだ。:6 剣は、その町々で荒れ狂い、そのかんぬきを絶ち滅ぼし、彼らのはかりごとを食い尽くす。:7 わたしの民はわたしに対する背信からどうしても離れない。人々が上にいます方に彼を招いても、彼は、共にあがめようとはしない。:8 エフライムよ。わたしはどうしてあなたを引き渡すことができようか。イスラエルよ。どうしてあなたを見捨てることができようか」とあります。神様の誠実と忍耐に基づいた慈しみの愛、これは神様がイスラエルの民を選ばれたがゆえに、イスラエルに無条件で注がれた愛なのです。それを見る時に、同じように選ばれた民である私たちも、神様の無条件の愛によって、慈しみの愛によって愛され続けてきたことがわかります。それを見る時に、私たちの罪深さもわかりますよね。

2. 信仰による救い (8)

さて、二つ目の肯定は、「信仰」による救いです。もともとこの「信仰」ということばには、「信頼」とか「忠実」とか「ゆだねる」という意味があります。またこの「信仰によって」ということばは、「信仰を通して」とも訳せます。むしろもっと言うならば、私たちは信仰を通してキリストによって救われるのです。5節に「キリストとともに生かし」とか、6節には「キリスト・イエスにおいて」、また7節にも「キリスト・イエスにおいて私たちに賜る慈愛」とあります。私たちは信仰を通してキリストによって救われるの

です。なぜこんなことを言っているかということ、私たちは全知全能の創造主なる神様を信じています。しかし、イスラム教も旧約聖書を用いるがゆえに、この創造主なる神様を信じているのです。もっと言うならば、ユダヤ教もこの旧約聖書の創造主なる神様を信じています。パウロがそうでした。彼は救われる前にも、この神様を熱心に信仰していたのです。熱心さの余りに彼はクリスチャンを迫害し、クリスチャンの死にも同意するほどだったのです。でもその時、彼は救われてはいませんでした。彼は信仰を通してキリストによって救われたのです。

◎私たちが信じること

では、私たちはいったい何を信じなければいけないのでしょうか？ローマ10：17に「信仰は聞くことから始まり」とありますから、私たちは何を信じなければいけないのか、正しく知る必要があります。エペソ2章から見ていくと、少なくとも三つのことが言えると思います。

一つ目は、私たちが罪人であるということ。それゆえに御怒りを受けるべき者であるということです。

二つ目は、神がどのような方かということ私たちが知らなければいけません。神は聖い方でした。なぜかということ、罪に対して怒る方だからです。にもかかわらず、神は愛でありました。そして神様はあわれみ豊かな方であるがゆえに、私たちの救いのために、キリストの十字架の贖いを用意されたのです。

そして三つ目に私たちが知らなければいけないのは、私たちが救われるということはどういうことかということです。それは、私たちがキリストとともに生きる者へと変えられたということです。つまり私たちは信仰だけでなく、信仰を通してキリストによって救われたことによって、救われた瞬間にキリストとともに歩むようになるのです。信仰を持って救われた後に、しばらくたってからキリストとともに歩み始めるのではなく、私たちが救われた瞬間にキリストとともに歩むのです。だから私たちの生活、歩みというのは、救われた瞬間に変わり始めるものなのです。ですからⅡコリント5：7に「確かに、私たちは見るところによってではなく、信仰によって歩んでいます。」と書いています。正しい信仰には正しい歩みが伴うものなのです。

3. 神の賜物としての救い (8)

さて、三つ目の肯定的な表現は、神の「賜物」としての救いです。冒頭で申し上げたように、信仰というのは、私たちが悔い改めて持たなければいけないものではないのか、神様が与えてくださるものなのか、少し頭がこんがらがる感じですよ？ところが、ピリピ1：29に「あなたがたは、キリストのために、キリストを信じる信仰だけでなく、キリストのための苦しみをも賜ったのです。」と明確に書いてあります。私たちは苦しみも賜わったけれども、キリストを信じる信仰も賜った。ですから、信仰も神様からのプレゼントだったのです。

B. 三つの否定

恵みによる救い、信仰による救い、そして神の賜物としての救い。これらをもう少し深めるために、今度は三つの否定的表現を見ていきましょう。

1. 信仰は自分からでたことではない (8)

まず一つ目は、信仰は自分から出たことではないということです。「自分から」というのは、「自分のうちに」とも訳せます。ですから、自分のうちから出たことではない。先ほどから信仰すらも神様から与えられたという話をしていますけれども、信仰は私たちから出たのではなく、信仰すらも神様が与えてくださったということに、当然、納得できない方々もおられるのです。先週もお話したように、私たちは罪過と罪の中に死んでいた者です。それは霊的に死んでいたという意味です。だから神様が働かれない限り、私たちはみずから悔い改めすることも、みずから信仰を持つこともできないでしょうという話をするのですが、そういう方々はいや違う、確かにここに死んでいたと書いてあるけれども、それはほぼ死んでいた、死にかけだったのであって、霊的に完全に死んでいたのではない。私たちが悔い改めすることや、私たちが信仰を持つことに関しては、まだ神様はその余地を残してくださっているのだ。だから私た

ちはみずから悔い改め、みずから信仰を告白するものだ。そういう方々は、伝道集会とかでこういう招きをするのです。皆さんは今、地獄に向かって進んでいます。あなたは今ほぼ溺れかかって死にそうになっているのです。しかし、主が今、あなたに手を差し伸べておられます。その手をつかんでください。そうしたら主はその手を引き上げてくださり、あなたを救ってくださいますと。聞いたことないですか？でも、私たちは死んでいるから、死んだ者はつかめないのです。

そこをもう少し見ていきましょう。エゼキエル36：25－26です。つまり、神様が働かれることによって初めて私たちは生きる、そのことを見ていきます。「：25 わたしがきよい水をあなたがたの上に振りかけるそのとき、あなたがたはすべての汚れからきよめられる。わたしはすべての偶像の汚れからあなたがたをきよめ、：26 あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。」。「肉の心」と言うと、私たちはつい罪の心と想像しがちですが、ここでは違います。「石の心」と「肉の心」を対比しています。石というのは硬くて頑なで、いのちがなく、偶像の材料になるものです。肉というのは柔らかくて、そこにいのちがあります。それを対比しているのです。つまり神は、私たちの心から頑なな死んだ石の心を取り除いてくださり、肉の心——新しい心、新しい霊を与える。神様がそれについてもう少し説明してくださっていますので、37：1－14を見てみましょう。「：1 【主】の御手が私の上であり、【主】の霊によって、私は連れ出され、谷間の真ん中に置かれた。そこには骨が満ちていた。：2 主は私にその上をあちらこちらと行き巡らせた。なんと、その谷間には非常に多くの骨があり、ひどく干からびていた。：3 主は私に仰せられた。「人の子よ。これらの骨は生き返ることができようか。」私は答えた。「神、主よ。あなたがご存じです。」：4 主は私に仰せられた。「これらの骨に預言して言え。干からびた骨よ。【主】のことばを聞け。：5 神である主はこれらの骨にこう仰せられる。見よ。わたしがおまえたちの中に息を吹き入れるので、おまえたちは生き返る。：6 わたしがおまえたちに筋をつけ、肉を生じさせ、皮膚でおおい、おまえたちの中に息を与え、おまえたちが生き返るとき、おまえたちはわたしが【主】であることを知ろう。」：7 私は、命じられたように預言した。私が預言していると、音がした。なんと、大きなどろき。すると、骨と骨とが互いにつながった。：8 私が見ていると、なんと、その上に筋がつき、肉が生じ、皮膚がその上をすっかりおおった。しかし、その中に息はなかった。：9 そのとき、主は仰せられた。「息に預言せよ。人の子よ。預言してその息に言え。神である主はこう仰せられる。息よ。四方から吹いて来い。この殺された者たちに吹きつけて、彼らを生き返らせよ。」：10 私が命じられたとおりに預言すると、息が彼らの中に入った。そして彼らは生き返り、自分の足で立ち上がった。非常に多くの集団であった。：11 主は私に仰せられた。「人の子よ。これらの骨はイスラエルの全家である。ああ、彼らは、『私たちの骨は干からび、望みは消えうせ、私たちは断ち切られる』と言っている。：12 それゆえ、預言して彼らに言え。神である主はこう仰せられる。わたしの民よ。見よ。わたしはあなたがたの墓を開き、あなたがたをその墓から引き上げて、イスラエルの地に連れて行く。：13 わたしの民よ。わたしがあなたがたの墓を開き、あなたがたを墓から引き上げるとき、あなたがたは、わたしが【主】であることを知ろう。：14 わたしがまた、わたしの霊をあなたがたのうちに入れると、あなたがたは生き返る。わたしは、あなたがたをあなたがたの地に住みつかせる。このとき、あなたがたは、【主】であるわたしがこれを語り、これを成し遂げたことを知ろう。——【主】の御告げ——」。私たちはただ死んでいただけでなく、骨になっただけでなく、その骨も干からびていたのです。そこに神が筋をつけ、肉をつけ、皮膚でおおってくださった後も、まだ生き返っていなかったですよ？主が息を吹きかける、その時に生き返ったのです。何のためですか？神が主であることを知るためです。つまり、なぜきょうこの学びをすることが大切なのか？救いが私たちの信仰から出たことではなくて、その信仰すらも神が与えてくださったということを知ることがなぜ大切なのかと言うと、それは神が主であることを知るためです。主が栄光を現されるために私たちはこの学びをしているのです。

それでは神様は不公平ではないでしょうか？なぜなら私たちが信じたから救われるのであって、信じないから滅ぼされるのでしょうか？選んでくださり、召してくださり、信仰すらも神様が与えてくださる。

それによって救われるのですか？では、神様に選ばれないから、神様に召されなかったから、神様に信仰を与えられないから救われなかったというのは、余りにも不公平ではないですか？でも聖書の答えはそうなのです、神様は公正な方ですけれども、不公平な方なのです。もし神様が不公平ではなく、公平な方だったら、つまりみんなに平等に受けるものを、ふさわしいものを与える方だったらどうなります？今ここにいる者すべてが一瞬で神様に滅ぼされます。それが私たちにふさわしいものだから。神様は不公平な方だから、私たちは救われたのです。私たちには何も良いところがないのに、私たちは何か特別に選ばれるようなものは何もないのに、私たちがみずから悔い改めたわけではなく、私たちがみずから信じたわけでもなく、何も神様の恵みを注がれる要素が一切ないにもかかわらず、それを受けるに値しない者に一方的に注がれたのが恵みなのです。神様が選んでくださったから、その神の選びのゆえに受けるに値しない愛を、無条件の愛を注がれたのです。イスラエルの民と同じように。それが救いなのです。

このことに対して少しきついきれども、ローマ9章で神様はこのように答えておられます。「:18 こういうわけで、神は、人を見こころのままにあわれみ、またみこころのままにかたくなにされるのです。:19 すると、あなたはこう言うでしょう。「それなのになぜ、神は人を責められるのですか。だれが神のご計画に逆らうことができましょう。」(先ほどの疑問と同じです):20 しかし、人よ。神に言い逆らうあなたは、いったい何ですか。形造られた者が形造った者に対して、「あなたはなぜ、私をこのようなものにしたのですか」と言えるのでしょうか。:21 陶器を作る者は、同じ土のかたまりから、尊いことに用いる器でも、また、つまらないことに用いる器でも作る権利を持っていないのでしょうか。:22 ですが、もし神が、怒りを示してご自分の力を知らせようと望んでおられるのに、その滅ぼされるべき怒りの器を、豊かな寛容をもって忍耐してくださったとしたら、どうでしょうか。:23 それも、神が栄光のためにあらかじめ用意しておられたあわれみの器に対して、その豊かな栄光を知らせてくださるためなのです。」と。神様は不公平じゃないか、そのことに対しての神様の答えは、一言で言うならば、「だから？私が神です。それは私が決めることです。」と。なぜですか？それを通して、神様が豊かな栄光を知らせてくださるためです。救いの主導権は私たちにはなく、神様にあるのです。

2. 救いは行いによるのではない (9)

2番目に、救いは行いによるのではないということです。私たちがこう聞いた時に、すぐに律法を守り行うことによって、私たちは救われないとリンクして考えますよね？確かにこのエペソの教会は、ユダヤ人もいたのですが、多くは異邦人でした。ガラテヤとかローマに比べて、エペソの中には律法についての記事が非常に少ないです。ですから、行いによるのではないと言った時に、私たちはその行いというのはいわゆる行い全般を指しているのとらえるのが自然です。それとともに、きょうはもう少し突っ込んで、先ほどからお話ししているように、私たちは信仰という行いによっても救われないということについて考えてみたいと思います。私たちは信仰を通して救われるのですが、信仰という行いを通しては救われられないのです。

どういうことか考えていきましょう。例えば、ある方は聖書が神のことばであることを信じています。それは正しいことです。そして、そのみことばが間違いのない、神のみことばだと信じ、確信を持っています。ある方は、救いの教理を正しく信じています。私たちは罪人であり、主イエス・キリストの十字架の贖いによって私たちの罪が赦されて、天に行くのだと。これももちろん正しいです。救いの教理をしっかりと信じている方もおられます。それゆえに熱心に伝道されている方もおられます。時には、自分のいのちさえいとわぬ、自分のいのちさえキリストにささげることができると堅く決心し、信じている方もおられるかもしれません。またある方は、毎週毎週教会に通い、あの人は本当に信仰の立派な人だねと、多くの方から信頼を得て、熱心に礼拝をし、奉仕をしている方がおられるかもしれません。それらは信仰を通してキリストによって本当に救われた者が、当然持つものではありませんが、裏を返すと、そういう行いをしているからと言って、その人が真の信仰を持っているという保証にはならないのです。ほかの宗教でも見ることができます。例えば、その宗教の教理をしっかりと理解している。その教理をしっかりと自分

のものにし、それに対しての確固たる信念、確信、信仰がある。一生懸命それを伝道し、一生懸命その宗教活動を行っている。そのために自分のお金も時間もすべてつぎ込んでいる。時にはその人はいいい人へと、その宗教活動を通して変化していくこともあるかもしれない。でも当然その人たちは救われていませんよね？同じようなことが教会の中でもあるのです。その教理が聖書に変わり、その救いが主イエス・キリストの救いになり、活動する場が教会に変わっているだけです。

私たちは信仰を通して、キリストによって救われるのです。キリストによって救われるというのは、その結果としてキリストとともに歩む生活が待っています。私たちは今まで自分の罪を喜びとしてきたけれども、私たちはこれからキリストを喜びとして歩むのです。私たちは今まで自分の罪に対して満足求めていたけれども、これからはキリストのみが私たちの満足なのです。今までは自分を動機として歩んでいたけれども、救われた者はすべて、キリストが動機となるのです。そのような信仰は、神様が与えてくださらなければ持つことができません。信仰は、努力によって得るものではないのです。

3. だれも誇ることのないため (9)

3番目に、だれも誇ることのないためです。このことに関しては、ある方がこういう例えをされていました。非常に高度な技術を求められる難しい外科手術をした外科医と患者の関係のようなものだ。その手術が成功した時に称賛されるのは、患者ではなく外科医ですよ？「いや、私、麻酔効いてる時にちゃんとおとなしく寝ていたの……」って、そんなことはないですよ？外科医が称賛されるのです。それと同じように、私たちは、私たちの持っている信仰すら誇れないのです。この救いに関しては、私たちが誇ることは何もないのです。神様だけなのです。それゆえに神様の栄光が現されるのです。それゆえに神様が主であることがわかるのです。なぜこんな者がそのような恵みを受けたのだろう。何も取り柄がないのに、もっとすばらしい方いっぱいいるのに。なぜ神様はこんな私を選んで救ってくださったのですか？それに対する答えがIコリントの1章にあります。「:26 兄弟たち、あなたがたの召しのことを考えてごらんください。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。:27 しかし神は、知恵ある者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。:28 また、この世の取るに足りない者や見下されている者を、神は選ばれました。すなわち、有るものがない者のようにするため、無に等しいものを選ばれたのです。:29 これは、神の御前でだれをも誇らせないためです。:30 しかしあなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとなりました。:31 まさしく、「誇る者は主を誇れ」と書いてあるとおりになるためです。」と。なぜ私たちが選ばれたのか？もし聖書の中に答えがあるとしたらここです。選ばれて救われた者というのは、実はこの世の中でも愚かな者なのだ、すぐれているから選ばれたのではない、弱い者なのだ。強いから神様が目を留めてくださったのではないのです。取るに足りない者なのだ、実は見下されている者なのだ。私たちはクリスチャンですという誇りはいっさいそこから出てこないのです。無に等しいものだった。だから私たちは誇ることはできないのです。もし誇るとしたら、ただ私たちを選び、私たちを救ってくださった主を誇るしかないのです。だからきょうの学びが大切なのです。この救いを私たちがいただいたを通して、感謝されるのは神のみなのです。賛美されるのは神のみなのです。神の栄光がほめたたえられるためです。私たちが、神が主であることを知るために、この救いがあるのです。

C. 表裏の関係にある恵みと信仰

さて、表裏の関係にある恵みと信仰ということについて考えていきましょう。最初に申し上げたように、きょうお話しすることは私たちが理解すべきことなのです。でも、完全に理解することは難しいです。まるで三位一体のようです。ですから私たちは両方を神の真理としてそのまま受けるしかありません。ヘブル11:6に「信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。」とあります。そして、使徒16:31には「主イエスを信じなさい。」とあります。信仰というのは私たちの責任だと聖書に明確に書いてあ

るのです。これは私たちに対する神様の命令です。ということは、信じることは私たちの責任です。これは聖書の真理です。神の命令ですから、私たちは信じなければいけないのです。

ところが、その信仰も神様が与えてくださると、聖書に明確に書いているのです。今まで学んできたことも含めて、それにプラスアルファして幾つかのみことばを見てみましょう。これを見ると、信仰は神様が与えられたものだとすることを否定できないのです。ヨハネ6：37「父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに來ます。」、これはイエス・キリストのことばですね？つまり父なる神様がイエス・キリストにお与えになる者がいるのです。それはみなイエス・キリストのもとに來るのです。6：44に「わたしを遣わした父が引き寄せられないかぎり、だれもわたしのところに來ることはできません。」、父が引き寄せられない限り、イエスの元に来ることはだれもできないのです。17：2「それは子が、あなたからいただいたすべての者に、永遠のいのちを与えるため」、父なる神様がイエス・キリストに与えたすべての者です。17：6「わたしは、あなたが世から取り出してわたしに下さった人々に、あなたの御名を明らかにしました。彼らはあなたのものであって、あなたは彼らをわたしに下さいました。」、否定できないでしょう？使徒16：14「テアテラ市の紫布の商人で、神を敬う、ルデヤという女が聞いていたが、主は彼女の心を開いて、パウロの語る事に心を留めるようにされた。」、神が心を開いてくださらない限り、私たちはみことばに心を留めることができないのです。結局、神様はだれに働き、だれに働かないのか決めておられるということでしょう？Ⅱテサロニケ2：13「しかし、あなたがたのことについては、私たちはいつでも神に感謝しなければなりません。主に愛されている兄弟たち。神は、御霊による聖めと、真理による信仰によって、あなたがたを、初めから救いにお選びになったからです。」、私たちは地の基が置かれる前から選ばれていたわけでしょう？地球が創造される前から、アダムとエバが罪を犯す前から私たちは選び、定められていたのです。14節「ですから神は、私たちの福音によってあなたがたを召し、（息を吹きかけてくださり）私たちの主イエス・キリストの栄光を得させてくださったのです。」。

これらのことはどう考えたら、私たちの理解の助けになるかと考えていたのですが、両方とも真理なわけです。信じることも私たちの責任であるし、でもその信じるということは神様から与えられたものだ。どうということなんだろう？だから「裏表の関係にある恵みと信仰」と考えたのです。私たちの側から見た時に、私たちが救われる手段は信仰を通してです。確かに私たちは信仰を通して救われるのです。でも神の側から見た時に、神様の救いの手段は100%恵みなのです。神様は恵みによって100%救われるのです。それに信仰も含まれている。この両方を私たちは、そのまま神の真理として受け取るしかないのです。

別の言い方をすると、神様は、主イエス・キリストの十字架によって私たちの前に救いを用意してくださいました。そして「はい、悔い改めする人？信じる人、だれかいませんか？」と尋ね、手を挙げた人に「では、このイエス・キリストの十字架によって救われてください」、手を挙げない人には「あなたは信じないのですか？では、あなたは滅びてください」と。この考え方だと主導権は私たちの側にあるのです。何が恵みであり、何が祝福であるか——。神様は不特定多数の中から、信じますと言った人を救われたのではないのです。神様は大勢の中から、皆さんひとりひとりを選ばれたのです。なぜ選ばれたのかはわかりません。でも、神様が無条件の愛で、ひとりひとりを選ばれた。神の恵みの栄光を現すためにです。すごくないですか？この教理、この教え。私たちの頭では考えつかないです。だから神なのです。人知を遥かに超えた恵みを私たちはいただいているのです。だから言っているのです。すべてを理解することは無理です。神様は、信じなさいと命令を与えられたと同時に、その信仰も与えてくださった。この両方をみことばに書いてある真理として受け取る。ただ私たちがフォーカスを向けるべきは神の恵みです。ヨハネ11章で、主イエス・キリストはエルサレムに上る途中、ベタニヤに寄られた時に、そこには親しく交わっていたマルタとマリヤがいました。主イエス・キリストがベタニヤに着かれた時に、その兄弟のラザロはもう死んでいました。主イエス・キリストはそのラザロの墓の前に立って、その墓石をのけ

なさいと言った時に、マルタは死んで4日もたっていますから、もう腐って臭いがしていますと言ったのです。主イエス・キリストは開けなさいと命じられた後、大きな声で叫ばれたのです。「ラザロよ、出てきなさい」と。そしてラザロはその時によみがえって出て来たのです。私たちの救いも同じことです。不特定多数の中から信じますと言った人が出て来て救われたのではなくて、神様は皆さんひとりひとりを名前と呼ばれた。皆さん、個人個人に注目されて、皆さん、個人個人を選ばれて、召してくださり、救ってくださったのです。救いは100%神様の恵みなのです。私たちは確かに神様に召された時に、その信仰を通して一步を踏み出して、神の前に立ちました。でも救われた後に私たちは知るのである。この信仰すらも神様の働きによって与えられたのかと。出てくるのは、もう神様に対する賛美と礼拝しかないです。神様、なぜこんな者があなたのあわれみを受けたのでしょうかと。なぜこんな者があなたに選ばれたのでしょうかと。

その時にさらに知るのである。私たち、以前はどんな者でした？自分の罪に満足し、神様に逆らう者でした。神の御怒りを受けるべき者だったのです。今、私たちは救いによってどのように変えられたか？今度、私たちは私たちのからだを通して、神の恵みの栄光を現す者へと変えられたのです。この恵みの栄光を告げ知らせるために、私たちは何をしなければいけないでしょうか？それは先週も話したように、毎日毎日自分自身にこの福音を語り続けることです。新しく来られた方に語るのも大切ですが、それと同じように大切なのは、私たち自身に福音を語ることです。私たちにも福音が必要なのです。私たちは以前どのような者だったのか、私たちがキリストとともに歩むために、キリストはどれほど大きな犠牲を払ってくださったのか、そして私たちは罪と罪過に死んでいた者で、神に逆らい、神の御怒りを受けるべき者であった。今、神様は私たちを通して恵みの栄光を現そうとされているのだと。これを毎日毎日、自分自身に語り続けることです。その時に神様は私たちを変え続けてくださるのである。